

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580051

研究課題名(和文) ロマン主義と啓蒙思想 ウィリアム・ハズリットの共感論に関する思想史的研究

研究課題名(英文) Romanticism and Enlightenment: William Hazlitt's Theory of Sympathy

研究代表者

松家 理恵 (Matsuya, Rie)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：90212224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス・ロマン主義を代表する批評家であるウィリアム・ハズリットの思想書『人間の行為の原理についての試論』を中心に、ハズリットの無私的想像力論がイギリス啓蒙思想をどのように継承しているのか、またどのような点で異なっているのかを明らかにしようとした。その結果、人間精神の本性的無私性を主張するハズリットの思想が、共感能力の重視においてシャフツベリ、ハチスン、またアダム・スミスなどの道徳哲学の系譜上の位置するのは明らかであるが、その議論の基盤が生得的道徳感覚ではなく、自己の未来と他者との間に区別をつけない想像力の働き方そのものに置かれているという点で、まったく新しい独自のものであることがわかった。

研究成果の概要(英文)：I have dealt with the question whether or not and how the Romantic critic/essayist William Hazlitt's theory of disinterested imagination, which was demonstrated in his philosophical book "An Essay on the Principles of Human Action," was indebted to British Enlightenment and in what way his argument differed from it. It has become clear that his belief in natural disinterestedness of human mind or sympathetic imagination is in the tradition of Scottish moral philosophy such as philosophies of Shaftesbury, Hutcheson and Adam Smith, but his argument is based on a different and quite unique theory about the function of imagination which finds no difference between the interests of the future self and those of others.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ウィリアム・ハズリット 想像力 無私性 イギリス・啓蒙思想 共感能力

1. 研究開始当初の背景

イギリス・ロマン主義を代表する批評家・エッセイスト・ジャーナリストとしてのウィリアム・ハズリットの評価は確立されて久しいが、21世紀に入り彼の唯一の思想書『人間の行為の原理について』を対象とする論集が発表されるまで、その思想についてはほとんど注目されることはなかった。しかしハズリット自身にとってこの最初の著作は生涯にわたって思想の根幹をなす最も重要な著作であり、その独創性を誇りにもしていた。またハズリットの思想のイギリス・ロマン主義および後世の文学者たちに与えた影響の大きさを考慮すれば、この最初の著作にもっと光をあてるべきだと思われた。

人間精神の本性的無私性というこの著書を中心テーマは、イギリス啓蒙思想(特にスコットランドの道徳哲学)に類似するよう思われた。しかし一般にロマン主義思想と啓蒙思想は相対立する思想と考えられているため、ハズリットの思想が啓蒙思想をどのような形で継承しているのか、また何が異なっているのかを明らかにすることによって、ロマン主義思想と啓蒙思想との関係性についての新しい理解が得られるのではないかと予測された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ウィリアム・ハズリット(William Hazlitt)における人間精神の生得的無私性、言い換えれば共感的想像力の思想を17-18世紀啓蒙期のイギリス道徳哲学の延長上に位置づけ、その関係性を明らかにすることによって、ロマン主義文学におけるハズリットの思想の影響を、より広い思想史的文脈の中でとらえ直すことにある。

より具体的には以下の3点である。

- (1) ハズリットの共感論、想像力論の鍵となる彼の唯一の思想書『人間の行為の原理について』において展開される人間の想像力の公平無私性の議論をシャフツベリやハチスンの道徳的人間論やアダム・スミスの共感論と比較検討することによって、ハズリットの共感的想像力論がどのようにイギリス(スコットランド)啓蒙思想の伝統を受け継ぎつつ、独創的な議論を提示したのかについて明らかにする。
- (2) 人間の行為の無私性についてのハズリットの議論の土台となっている想像力について、ハズリットの冗長で複雑な議論を分析し、その論理的展開を明示する。そしてなぜハズリットがこの思想書を自分の最も重要な著作と考え、彼の批評活動においても基盤となしたのかを、「無私的想像

力」という観点から明らかにする。

- (3) ハズリットの思想のロマン主義文学における影響を考察する。その手がかりとして、ハズリットの文学批評において、彼が自己の主張する共感的無私的想像力の理想的な発現とみなしたシェイクスピアの作品についての批評と、強い自我意識のもとに終始自己を関心の排他的対象とするワーズワス評に焦点をあて、その同時代および後世への影響を検討する。

3. 研究の方法

- (1) ハズリットの思想書『人間の行為の原理について』の翻訳を完成し、その分析を進める。
- (2) 上記のハズリットの著作についての先行研究について、研究書および論文を収集し研究する。
- (3) ハズリットの文化的背景(ラディカルな非国教徒の文化と教育)について伝記的資料から研究する。
- (4) シャフツベリ、ハチスン、アダム・スミスの著作を中心にイギリス啓蒙期の道徳哲学について資料収集を行い、特に人間精神の公平無私性と共感能力に関して研究する。
- (5) ハズリットの公平無私性の思想が、その批評にどのように反映されているかを、『シェイクスピア劇の登場人物たち』『イギリス舞台評』『イギリス文学講義』『ラウンドテーブル』等の著作の中の特にシェイクスピアとワーズワスについての批評に焦点を当てて明らかにする。

4. 研究成果

- (1) 本研究テーマについて鍵となるハズリットの思想書『人間の行為の原理について』の翻訳を完成し、「訳者あとがき」で、ハズリットに対する昨今の批評の動向、この著書のテーマ、およびハズリットの文化的思想的背景について簡単な説明をした。
- (2) 人間精神の本性的無私性を説く『人間の行為の原理について』を分析し、スコットランド啓蒙思想(特にハチスンの道徳哲学)の影響を確認したうえで、ハズリットの議論の独創性を明らかにした。

ハズリットの議論の主眼、その独自の点とはつまり、人間の意志的行為は未来にのみかわるが、現実に存在しない未来の自己への関心は、想像力が生み出す未来の自己の観念に基づいており、この想像力の働きに

頼るという点で、他者に対する関心と何ら変わらないという主張にある。言い換えれば、ハズリットは自我の観念（あるいは自己同一性の観念）と結びついた人間の本性的利己性の主張に対する反論として時間のパースペクティブを持ち込み、未来を非-実在として現在と過去の自己から切り離すことによって、「未来の自己」と「他者」が想像力の対象としては本質的に同質であると論じる。そしてその点において人間の精神が本質的に自他の区別がない公平無私なものであることが証明されると主張するのである。

つまりハズリットの議論が依拠しているのは、ハチスンの言うような生得的道徳観念ではなく、人間の意志的行為や他者への共感を担う想像力の働きの本質的性格に他ならないのである。

以上の分析結果を論文「ハズリットの『試論』における未来の自己の他者性と無私的想像力」として公表した。

- (3) ハズリットの思想のロマン主義文学への影響の研究としては、彼の文学批評のうち、シェイクスピアとワーズワスについての批評に焦点をあてることによって、彼の文学批評が、『人間の行為の原理について』で論じられた無私的想像力論に基づいていることが明らかになった。

つまりハズリットは、シェイクスピアの劇作品、その個々の登場人物の中に作者の無私的（あるいは共感的）想像力の発現の極致を見、シェイクスピアの天才を称揚した。また一方彼が同時代の詩人の中で最も高く評価するワーズワスについては、彼の作品が自己への排他的関心に基づいていることを指摘する。

これらのハズリットの文学批評は、詩人キーツのシェイクスピア崇拜や「自己中心的崇高」というキーツのワーズワス批判にみられるように、同時代において大きな影響を与えただけでなく、たとえば20世紀においてワーズワス批評の中心的な存在であったハートマンの議論を先取りすることも言えることがわかった。

ハズリットの思想の影響については、今後対象をさらに広げて研究を深めるつもりである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

松家理恵、ハズリットの『試論』における未来の自己の他者性と無私的想像力、神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』、査読無、第45号、2015、69 - 87

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta/pub/G0000003kernel_81009197

松家理恵、＜翻訳＞ウィリアム・ハズリット著『人間の行為の原理について 人間精神の生得的公平無私性を擁護するための議論』(下)、神戸大学近代発行会、『近代』、査読無、第111号、2014、19 - 49

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta/pub/G0000003kernel_81008697

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松家 理恵 (MATSUYA, Rie)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授

研究者番号：90212224

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者
なし ()

研究者番号：

(4)研究協力者
なし ()